# World Athletics：　Athletics Officiating　A Practical Guide
# 日本陸上競技連盟　C 級公認審判員養成テキスト

## 第 1 章　ガイドブックの目的

陸上競技の競技規則は、一部日本の実情に合わせて変更しているものを除き、基本的に中学校・高校の競技会でも世界陸上でも日本選手権でも同じです。このテキストの目的は市区町村の競技会から国際的な競技会まで競技役員に対して適切なアドバイスを与えることです。競技場の状態や設備は都道府県によってさまざまなため、以下に述べるようにはいかないこともあるかもしれません。しかしながら、できるだけ、公平で規則に忠実な運営をしたいものです。

**注：本ガイドブックの中で「審判員」と呼称する場合は、現場で判定に関わる者を指し、「競技役員」と呼称する場合は、その競技会の運営全般に関わる者を指します。**

## 第 2 章　審判員の資質（良い競技役員に求められること）

多くの競技会は理想的にはより少ない人数で運営されなければなりませんが、陸上競技会が適切に運営されるには少なくとも 50 名以上の競技役員の協力が必要となります。基本的な責務は競技種目を注意深く準備して参加している競技者に公平な競争を通して自己記録の更新の機会を与えることです。

まず、競技者を第一に考えなければならないことを強調しておきます。日本陸上競技連盟（以後、日本陸連）、World Athletics（以後、世界陸連）の競技規則は、参加競技者ができるだけ不公平にならないように考慮されています。

**・陸上競技ルールブック**

WA の競技規則は 2 年ごとに、日本陸連の競技規則は毎年発行されています。審判員にとってルールの知識が豊富なことは重要です。規則正しく審判をしようとしている者にとってルールブックは不可欠なものです。しかし、ルールはすべての可能性がある事象をカバーしてはいないので、経験の深い審判員同士でさえ、あるルールの解釈が違った意見になることがあります。そのような場合の指導方針は「ルールの意図するところは何か？」を考慮することです。

また、競技会ごとに決められた申し合わせはプログラムの競技注意事項に書かれています。ルールブックと合わせて必ず、確認をしましょう。

**〇判定**

競技役員は、特定の競技者が有利になることのない、また不利益を被ることがない、公正な競争を保証しなければなりません。言い換えれば、全ての競技者に平等であることです。

審判員はいかなる状況であっても、「全ての競技者にとって公平な決定とは何か？」を考えなければなりません。

**〇社会性**

多くの競技者は競技中緊張しているので、競技役員のちょっとした独裁的な態度が競技者をすぐに不快な状況に陥らせる可能性があります。それを避けるために競技者のことを理解し、対応しなければなりません。少数の競技者は非協力的な場合があり、これらはしっかりと対応しなければなりません。審判長は競技者にイエローカードを提示して警告を与えることができます。またレッドカードを提示することによって競技者を、以後の競技から除外することもできます。

**〇遅延**

競技が競技日程通りに進行しない場合があります。天候の急変など理由は様々ですが、できるだけ元の競技時程に戻るよう工夫します。ただし、競技者を急かすことのないよう注意したいものです。

**＜まとめ＞**

**それゆえ、競技役員に求められる資質は、**

**①常識と機転**

**②高いレベルの集中力**

**③素早い反応**

**④不愛想でなく、はつらつとした、断固とした態度**

**⑤競技の要求や規則についての知識と理解**

**⑥競技者の要求の理解**

次に陸上競技役員の役割について可能な限り詳細に定義していきます。

## 第３章　運営役員

レベルの高い競技会では、競技役員間に役割の違いがあります。すべての競技会では、総務がおり、レベルの高い他の競技会では競技会ディレクターをおくことがあります。

**(1) 競技会ディレクター**

すべての競技役員と連絡を取り合って競技会の進行をつかさどる役員。必要に応じてトラック、フィールド（跳躍競技、投てき競技）と分業して現場とのやり取りをします。

またテレビ中継が入るような競技会ではテレビ中継のスタッフと連携して競技会を進めます。

**(2) 総務**

競技役員の任命と競技会運営業務の遂行に全体的な責任を持つ役員。必要に応じて総務員（アシスタント）を置き、業務を分担します。

**(3) 技術総務**

競技会に必要な用器具や帳票類の準備に責任を持つ役員。

**(4) 公式計測員(国内大会のみ)**

競技場の設備や用器具の規格を測定・確認する責任者（技術総務と兼務が多い)。

**(5) 用器具係**

技術総務の下で競技に必要な用器具類をトラックやフィールドに設置する担当者。

**(6) 競技者係**

競技者の招集を行い、スタートライン（フィールド）に立つ前の競技者の準備を確認する役員。

**(7) ジュリー**

競技者が競技の結果に不満を持ち、審判長に説明を求め、その説明に納得できない場合に最終的な裁定を求めることができるシステムがあり、その裁定を行う役員。通常、経験が豊富な方が複数名で票決を行うことになっています。

**(8) マーシャル**

競技場内（Field of Play = FOP）に関係者以外を入れないようにしたり、カメラマンのコントロールや役目についていない審判員を排除したりして場内を整理統合する役員。

**(9) 医務員（医師）**

競技者や競技役員、時には観客の救護にあたる医師・看護師等の医療従事者。

**(10) NFR・DCO・シャペロン（ドーピングテスト関係）**

ドーピングテストのために中央から派遣される責任者が NFR(National Federation Representative )、検体採取に立ち会う役員が DCO(Doping Control Officer)、テスト対象競技者を監視しエスコートする係員がシャペロンと呼ばれます。

**(11) アナウンサー**

スタートリストの紹介、途中経過の通知やフィニッシュ予想時間の通知、競技結果報告などを行う役員。

**(12) 記録情報処理員**

競技現場で記録を PC 入力したり、写真判定室や風力計測員、トラック競技審判長から寄せられた競技結果を取りまとめたりして、公表に備える役員。

**(13) 役員係・庶務係**

競技役員の出席点呼、審判記録の整理、昼食の手配、競技場使用料の支払い等、競技会運営にかかわる周辺の事案を処理する役員。

**(14) 報道係**

取材に来る報道関係者を受け付け、取材許可を与え、報道関係者をコントロールする役員。

**(15) 表彰係（入賞者管理係）**

賞状作成、受賞記念品を整理したり入賞者を確保して入賞者待機場所に連れてきて表彰式を執り行ったりする役員。

## 第 4 章　トラック競技

**(1)トラック競技審判長**

トラック競技の成績について責任を持つ審判員。監察員の報告を受けて競技者が失格で

あるかどうかを判定する権限や、決勝審判員が着順の判断に疑義・混乱が生じているときに最終的な決定を下す権限を持ちます。また再レースや組編成の適否を判断し不適切な場合には組直しをさせる権限も持ちます。さらに競技者やコーチ・監督から抗議や質問を受けた時にはそれに対して回答を行い、競技会にジュリーが指名されていない場合は審判長の裁定が最終的な決定となります。

スタートを特に取り扱う審判長がスタート審判長と呼ばれます。

**①トラック競技審判長の任務**

(a)すべてのトラック競技を統括し、すべての競技規則が遵守されていることを監察する。
(b)トラック競技審判員主任および監察員に任務を割り当てる。
(c)トラック競技審判員間の見解の相違に対して決定を行う。
(d)各種目の成績表を点検し、署名する。
(e)管轄するトラック競技のいかなる争点や抗議、異議に対しても規則に則して処理する。
(f)不適切な行為をした競技者に対しては警告を与える、または除外をする。

それゆえ審判長はルールブックの各該当規則についての解釈をしっかりと持ち、それを応用する力量を持たなければなりません。競技規則でカバーしきれない決定をしなければならないときは、公平性、気配り、慎重さが求められます。

トラック競技審判長は技術総務と協力して競技場を点検します。すべての競技用具が利用可能で準備されており、すべての必要なトラックマーキングがあることを確認しなければなりません。

また、会場内の連絡網やそれぞれの部署が機能的に運営できる状態になっているかを確認して競技会を開始し、最初の種目を時間通りにスタートさせなければなりません。

注意していても、事故は時々発生します。審判長は事故が起こりうると容易に想像できる場合にはその原因を取り除くために、できるだけ早く問題を解決する責任があります。

時々、まれに再レースを行うような判断を迫られるような状況が発生します。審判長は競技結果が無効で、可能であれば同日に、不可能ならば近日中に再レースを実施させる権限を持っています。

**(2)トラック競技審判員（決勝審判員）**

トラック審判員（決勝審判員）はトラックの同じ側に位置し、競技者がフィニッシュした順序を決定します。主任は最終の順位を決定します。写真判定装置がない状況で、もし主任は順位決定をすることができなかったら、事案をトラック審判長に報告します。

**①トラック競技審判員の資質**

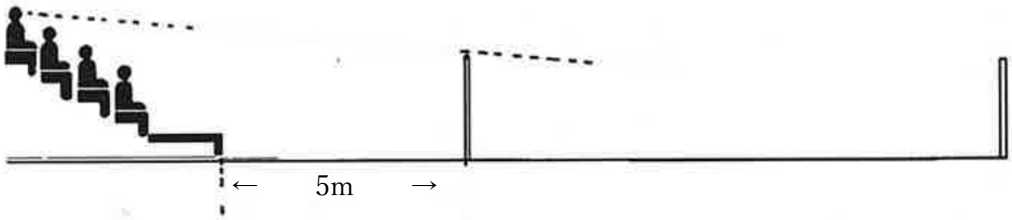
(a)他の審判員と相談せずに競技者がフィニッシュした順序を決定しなければいけません。
(b)冷静でなければなりません。
(c)高度な集中力を持たねばなりません。

**②審判員の位置**

審判員が任務を十分に遂行するためにはフィニッシュを見るために最も見やすい位置を確保することが重要です。

**フィニッシュ面の延長上の位置が不可欠**

それらはトラックの外端から少なくとも５m離れていて、競技者がよりはっきりと見える十分な高さであるべきです。




大抵の陸上競技場は審判員にはっきりとしたフィニッシュの様子を提供できる移動が容易で適切な階層のスタンドを備えています。

それ故まとめると、良い審判員の位置取りは以下の３点になります。

**(a)フィニッシュラインの延長線上に位置取る。**

**(b)グラウンドレベルよりも高い位置にいる。**

**(c)トラックの外端からある程度離れたところに位置取る。**

**トラック競技審判員に必要な用具**

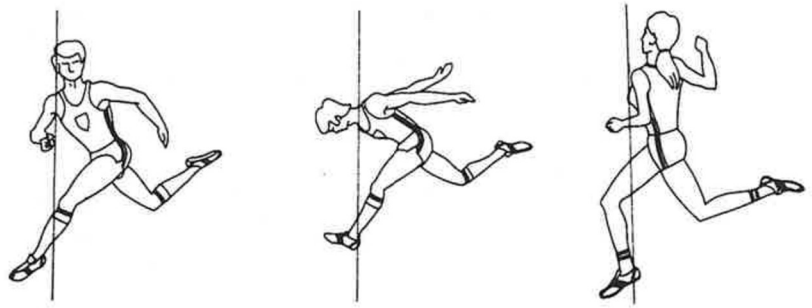
ルールブックに加えてトラック競技審判員は義務を遂行するために求められる様々な物を所持しています。競技会のプログラムや書類を画板に留めるクリップやゴムバンド、鉛筆やスペアの用紙がそれにあたります。いろいろなことを経験するうちに必要なものが増えていきます。

**③トラック競技審判員の義務**

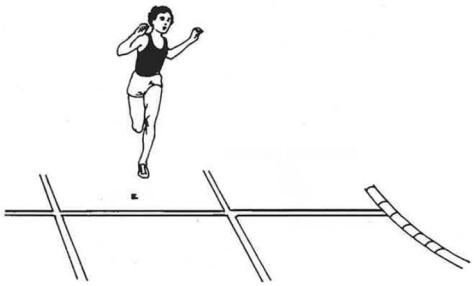
競技会が始まる前に審判員はトラック競技審判員主任から役割分担のスケジュールを受け取りプログラムに任務を書き込んでおきます。

**④競技者の順位**

トラック競技審判員はフィニッシュ地点で決定した順位を競技者が身に付けている番号（ビブス・腰ナンバー標識）で記録表に記入します。



競技者は上記の図のフィニッシュラインのスタート側に近い方の垂直面に胴体（トルソー＝頭・首・腕・脚や手足と区別される）が到達した順序で順位づけられます。



経験豊富な審判員は通常フィニッシュライン手前約 10m から走者を見ています。そしてフィニッシュラインに目を移します。経験の少ない審判員はフィニッシュラインだけで走者を見ている傾向があります。そうすると実際のフィニッシュから 1 メートルほど手前で順位を決めてしまう危険性があります。実際には最後の 1 メートルで追い抜かれることもあるので、フィニッシュラインの 1 メートル先で判断をするのと同じくらい危険です。

もし走者がフィニッシュラインに達する直前に転倒した場合、もし走者のトルソーのいかなる部分でもラインに達していれば順位が付きます。

主任が各審判員の提出した順位を記録し、審判長が最終判定を行います。

審判員が全員一致していれば問題ありません。審判員から提出された着順が完全に一致していなかった場合、審判長が結果を定めなければなりません。

**⑤トラック競技審判員のその他の機能**

トラック競技審判員の主な任務である着順を決めることと同様に、できる限り；

(a)800m を超える全ての種目においてスタートからフィニッシュまでレースを見ることにより正しい距離をカバーしていることを確認します。

(b)また周回記録員として振る舞うことや最終回の前にベルを鳴らすことを要求されるかもしれません。決勝審判員は長距離において周回記録員を補助することもあります。

**(3)写真判定員**

写真判定員主任とアシスタント写真判定員は写真判定装置が使用される競技会では指名されます。写真判定員主任は計時装置の機能について責任を持ちます。アシスタント写真判定員と協力して競技者の順位とそれぞれの時間を決定します。承認された全自動計時システムが使用される時、それから読み取った記録が公式とされます。しかしながらもし、写真判定員主任が装置は適切に機能していないと決めればバックアップ計時員の手動計時が公式となります。

もし電気計時装置がスターターのピストルや承認された機器によって始動しなかった場合、画面で読まれた時間は公式ではないが、画面上で得られた時間間隔は利用できます。

競技の開始前に写真判定員はトラック競技審判長、ス

ターターと協力してゼロコントロールテストを監督します。

(4)計時員（第 127 条、第 165 条　CR20,TR19）

①計時員

主要競技会の写真判定装置の導入にかかわらず、手動計時の需要は依然としてあります。

②ストップウォッチ

計時員に求められる第一は、手動で操作するストップウォッチに信頼をすることです。時計は大切に扱われる必要があり非常に高い水準で維持される必要があります。それらはスプリットタイマーがあると有益です。

③時計の持ち方

時計の持ち方はただ一つの持ち方がある訳ではありませんが、エラーを減らすある方法があります。

(a)時計はスタートとフィニッシュで正確に同じ方法で保持します。

(b)それらを静止して保持し無駄な動きを排除します。

(c)親指をスタートボタンの上に置き、人差し指は反対側のボタンの上に置きます。

(d)親指でボタンを強く押して時計をスタートさせ、さらに人差し指でボタンを押して時計を止めます。

④スタート

計時員は競技者が位置に着いたらすぐにスターターを注視し準備態勢をとります。計時員の注意はただ一つのことに集中しそれ以外のあらゆることは無視します。スターターがピストルを上げたら、計時員はスターターのピストルの閃光か煙を見たらすぐに時計をスタートさせる準備をします。

⑤フィニッシュ

高いスタンドは有利であるとはいえ、フィニッシュラインのスタートラインに近い側の端の垂直面に競技者のトルソーのどの部分でもが到達した瞬間にレースが終わります。

計時員はフィニッシュラインに近づく走者を見るのではなく、競技者が最後の数メートルを走っている間のフィニッシュラインに注意を集中します。

優勝者の計時は先頭の走者のトルソーのどこかの部分がフィニッシュラインの面に到達した瞬間に時計を止めなければならないので最も簡単な仕事です（トルソーは頭、首、腕、脚、足を含まない)。

他の走者の計時のために計時員は走者がフィニッシュの手前の位置から見ます。計時員はその注意力をフィニッシュラインに集中します。

レース終了後、各計時員は各自の計測時間を公式書類に書き込みます。各書式には、種目、着順の次に自分の時計から読み取った計測時間を書きます。彼は各競技者の時間を決定する計時員主任にその記録用紙を渡します。もし 100 分の 1 秒計を使っていたならば、時間を 10 分の 1 秒に切り上げて公式時間を記録します。

⑥反応の均一性

時計を即座に始動させたり止めたりすることは不可能ですが、ピストルの閃光を見てからの反応時間と競技者がフィニッシュラインに到達してから時計を止める時間が同じであれば、計時員は正しい時間を得ることができます。それ故、この間隔がいつも同じ、常に同じであることが不可欠です。これはスタートにおいてもフィニッシュにおいても冷静な集中状態でのみ得ることができます。

もし経験豊富な計時員と一緒に働く未熟な計時員が経験豊富な計時員よりも計った時間が早いということがわかるならば、それはフィニッシュ地点の予想あるいはスタート時点の遅い反応に原因があるかもしれません。もし時間が遅かったとすれば、それはフィニッシュの遅れた反応のためでしょう。根気強い練習、そして豊富な練習だけが良い計時員を育てます。

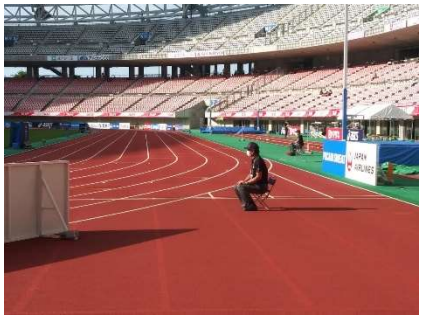
⑦ミーティングにて

計時員主任は様々な計時員に彼らの任務、各個人が主任の計画においてこれらの指示をはっきりと遂行すべきことを伝達します。各計時員は他の計時員と相談せずに要求されたことを行なわねばならず、未熟な計時員はどうしてエラーが起こったかを知りたい時でも、完全な記録が決定されるまで他人と時間について相談していけません。

⑧写真判定（全自動電気計時）

規則では手動計時と写真判定の二つの計時方法が認められます。写真判定が用いられる競技会では写真判定員主任は計時機器の機能について責任を持ちます。写真判定員と共同して競技者の着順とそれぞれの記録を決定します。これらの場合、手動計時員は写真判定員主任と写真判定員の必要不可欠なバックアップチームとなります。それらのすべてはトラック競技審判長の責任下にあります。

(5)監察員（第 127 条　CR20）



監察員はトラック競技審判長のアシスタントであり、彼らが見た競技規則違反を審判長に報告します。監察員は決定を下す権限はありません。彼らは審判長が決定した位置に座り、もしくは立ってレースを監察します。

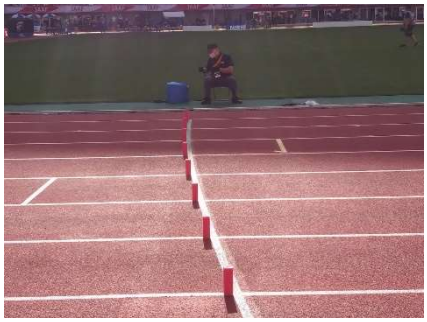
各監察員は黄旗を持ち、それによって彼らが審判長に報告すべき事を見た時に挙げます。トランシーバーやインカムがあればそれらを使って監察員主任あるいは審判長に報告します。彼ら競技者の番号やその他必要な情報を記録し、適切な物（監察マーカー等）で競技者が違反のあった場所にマークします。

①監察員の義務

(a)競技規則違反がないか、発生した事案が意図的なのか偶発的なのか決定する補助として競技者を見ること

(b)特に曲走路において、割り当てられたレーン外を走っていないか走者を見ること、もし、

目撃したら起こった箇所のトラックに正確にマークするか記録し、トラック競技審判長に報告する。



(c)ハードルや障害物競走で障害物を正確に越えているかどうかを見る。

(d)リレーのテイク・オーバー・ゾーンを監督する。

(e)800m、4×200m、4×400m リレー等でブレイクラインをチェックする。

**(6)周回記録員（第 131 条　CR24）**

**①周回記録員の任務**

800m を越える距離のレースで次のことをします。

(a)1500ｍを越えるレースでは周回数やラップタイムを記録します。

(b)最終回に鐘を鳴らします。できればすべての競技者に行うことを推奨します。

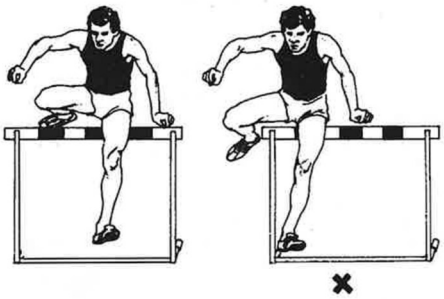
(c)周回記録員はレース中の競技者に残りの周回を知らせるボードを用意します。この表示は先頭の走者が直走路に入ったときに変更します。周回遅れの競技者には手持ちのカードによって残りの周回を知らせます。

(d)手動計時と写真判定の連携でどのランナーがフィニッシュするかを知らせること。これは周回遅れの競技者がいるときには重要です。

**(7)特殊種目**

**①ハードル競走（WA ルール第 168 条　TR22）**

　全てのハードルレースはレーンを走り、各競技者はレース中そのレーンをキープしなければならなりません。



　ハードルを超える時に抜き足（脚）がハードルのバーの上部水平面より低い競技者、自分のレーンでないハードルを跳び越えた競技者、審判長の見解で手や足で故意にハードルを倒した競技者は失格となります。

　ハードルは WA ルール第 168 条（TR22）に詳細が述べられています。

**②障害物競走（第 169 条　TR23）**

障害物は通常非常に重いので、それらを倒したり、移動させたりすることはほとんど不可能です。

競技者は障害物を彼が選ぶどのような方法で越えても構いません。彼は障害物をハードルレースのように越えても良いし、手を使って跳び越えても良いし、バーの最上部に足をおいて、あるいはバーの最上部に両足を乗せても良いことになっています。ハードルレースと同様に競技者は障害物を越える際に抜き足（脚）が障害物のバーの最上部の水平面よりも下であってはいけません。

水濠において競技者はこの特殊な 3.66m の障害物を跳び越えても水の中を進んでも良いが通過しなければならず、水を避けて横に飛び出したり、最後まで進むことなく離れたりすれば失格となります。

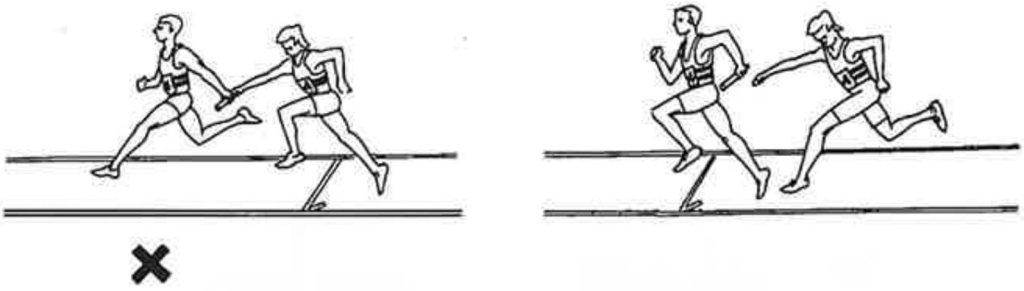
**③リレー競走（第 170 条　TR24）**

テイク・オーバー・ゾーンに割り当てられた監察員はどのレーンにどのチームが割り当てられているかを知る必要があります。テイク・オーバー・ゾーンに割り当てられる監察員の人数は競技会の規模や性質によります。しばしば複数レーンを担当し、そのために多くの責任・義務が要求されます。

各競技者は各自の指定されたテイク・オーバー・ゾーン内で引き継ぎを開始し終了させなければなりません。競技者は各自のレーン内においてチェックマークを一つだけ置くことができ、粘着テープを使用します。

監察員は引き継ぎ場所で準備ができたことをスターターに知らせなければなりません。

そして、レースが開始したら、バトンがテイク・オーバー・ゾーン内で競技者から他の競技者に手渡しされるのを注意深く監察しなければなりません。手渡しは受け取る競技者の手だけにバトンが収まった時点で完了します。バトンの位置だけが決定的であり手や足、胴体といったものは重要ではありません。時々受け渡しの際にバトンが落下します。それは落した者が拾わなければなりません。バトンを落した前走者は、それを拾うためにレーンを離れることができますが、走る距離を短くしない、他のチームを妨害しない限り失格には該当



しません。バトンが手渡された後でさえ、競技者が安全にレーンを離れる前に他の競技者を

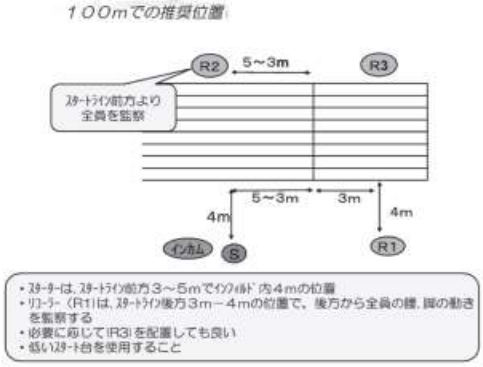
邪魔しないかどうか監察します。

4×400m リレーにおいて、最初の引き継ぎは、まだ割り当てられたレーンにいるために問題は滅多に起きません。しかし第 2、第 3 の引き継ぎではバトンを受け取る競技者が割り当てられたエリアにいるか確認し、不公平な押し合いや妨害がないかどうかを特別に注意深く見ます。

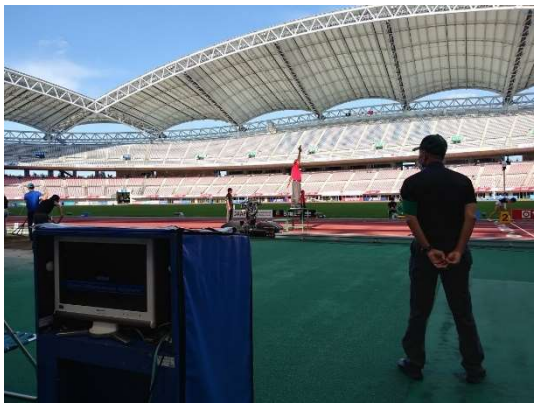
この引き継ぎにおいて、競技役員は前走者がフィニッシュラインから 200m の地点での順番で次走者を内側から外側に整列させます。

すべてのチームがバトンの引き継ぎを終えた時、引き継ぎ場所担当の競技役員は審判長にすべてが正しく行われたかどうかを知らせなければなりません。

規則違反があったならば監察員は黄旗をあげてトラック競技審判長に知らせ、トラック競技審判長は速やかに監察員と連絡を取り事実を確認し、関係するチームの失格が妥当かを決定します。




(8)レースのスタート



①スターター（第 129 条、第 130 条、第 162 条 CR22,23,TR16）

良いスターターは身体的、精神的に反応や視力が良く、機敏に対応できなければなりません。またスターターは良く通る明瞭な声で指示を発するべきです。彼は自信を持ち、静かに決心し、パニックなしでどんな状況にも対処する忍耐力を持たなければなりません。

スターターは競技者から信頼を持たれるためにも公正かつ正確でなければなりません。スターターは競技者を助けませんし、自分を誇示するためにそこにいるのではありません。

初心者のスターターは、経験豊富なスターターを可能な限り頻繁に見て、質問をし、可能な限り出発係として行動し、重要な義務についてできるだけ多く学ぶ必要があります。

②スターターの任務

スターターは協力者としてリコーラーと出発係がいますが、レースのスタートにおける第一の決裁者です。最終的な決裁者はスタート審判長になりますが、その前の判断はスターターにより為されます。スターターは競技会の定時進行やすべての競技者が公平で良いスタートができるように保証しなければなりません。出発係は競技者の氏名・番号ならびに、

正しいレーンやスタートラインというスタートポジションに着くことを確認します。出発係はまた、競技者が正しく衣類を着用し、もし競技者が全天候でない競技場で自分のスターティングブロックを使うときには、規則に示された仕様に合致していることを確認します。さらにリレーの第１走者に対してバトンを用意する必要があります。

**③スターターの位置**

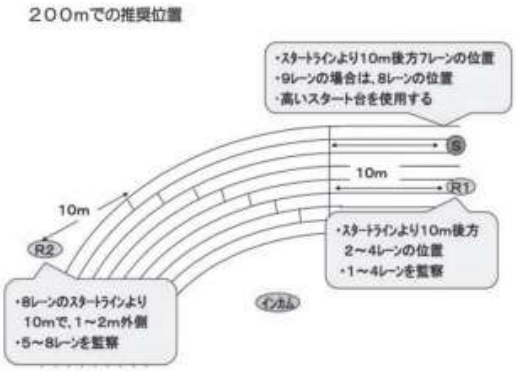
スターターは競技会開始前に、最適なポジションを定めるためにトラックを見ておく必要があります。レースが階段状のレーンで開始される時（200m、400m 等）は最も重要であり、スタート地点周辺のすべてのグラウンド設備・機器がクリアであること、スターターや競技者の気を散らすことがないようにする必要があります。計時員が準備完了していない状態でスタートすることはできないので、計時員主任がどこに立っているか、フィニッシュ地点の準備完了がどんな方法でスターターに伝えるか確認することは必要です。もし写真判定を使用するならば、スターターは写真判定員主任が準備できていることを確認する必要があります。

どこ立つべきかを決めるための考慮する要点は

(a)スターターから最も遠い競技者に明瞭に声が聞こえる適切な距離

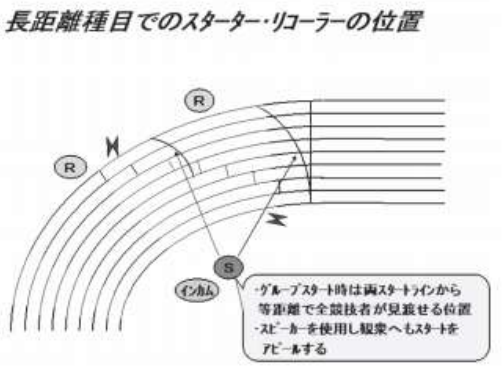
(b)すべての競技者を狭い視野に収めることができること

(c)計時員を目視でき、また計時員から見えること




競技者がクラウチングポジションでスタートする時、最初の動作は後ろ側の踵で為され反対側の手がグラウンドから離れるものです。それゆえスターターと/またはリコーラーはグラウンドから離れるいかなる手の動きでも見ることができるように、可能な限り狭い範囲の視野で競技者の手がはっきりと見えるようにすることが不可欠です。

図は各種目におけるスターターの推奨する位置です。




**④スタートの手順**

約１分前に、スターターは自身のポジションに立ち、計時員、決勝審判員、写真判定員に準備ができたことを知らせ、それに返信するという手続きが始まります。

(a) 競技者を待機位置に立たせる。
(b) ピストルを構える。
(c)「On your marks (位置について)」を明瞭な声で発する。
(d)すべての競技者がスタート位置に構えているのが見えることを確認する。

階段状のレーンでスタートするすべてのレースにおいて、スターターは彼の指示が競技者の近くに配置されたスピーカーに連動するマイクロフォンを使います。そのような装置が使えないとき、スターターは各競技者と自身の距離がほぼ同一になるような場所に立ちます。WA の推奨では、110mH までのレースにおいてスターターは競技者の前方インフィールド側に立ちます。

400m までのレース（4×400mリレーのスタートを含む）では競技者がスタートラインの手前でレーンの中にいなければなりません。両手と少なくとも片膝はグラウンドに接触していなければならず、（靴が地面に接触していなければならないことではなく）両足がスターティングブロックに接触していなければなりません。

(e)すべての競技者が自らの位置に着いて安定し完全に静止したとき、スターターはピストルを発砲させる前、競技者に十分な集中をさせるためにわずかな間を置きます。

(f)すべての動きが止まったときにスターターは「Set（用意)」の指示を与え静止を確認して発砲します。ます。もしスターターあるいは出発係が競技者の手や足の状況に満足しなかった場合、あるいは競技者が理想的な時間内で構えなかった場合、スターターは「立って（Stand up)」の指示を行い、スタートの手順をやり直します。

良い、公平なスタートとは発砲よりも前に出発することなく、誰も取り残されることなく全競技者が素早く同時に出発することです。

「Set（用意)」を用いないレースにおいては、競技者がスタートポジションに足を置き静止を確認して発砲します。

**(9)不正スタート**

もし競技者がピストルや承認されたスタート機器の発砲前に、最終で完全なセットポジションからスタート動作を開始した場合、不正スタートとなります。

「On your marks」「Set」の指示の後、競技者は遅滞なくスタートできる体勢にならなければなりません。不適切な遅延はまたイエローカードが与えられます。スターター/スタート審判長は、もし競技者がいかなる方法においても他の競技者を不公平に惑わせた場合は警告を与える行為と判断して良いでしょう。

リコールの発砲は、ピストルの発砲を聞くことなしに発砲と同時にスタートしたような場合に必要です。もしスターターがスタートの状況に満足できない場合は直ちにリコールの発砲をすべきです。リコール後、ピストルを再充填し、スタートの手続きを前と同じように正確に繰り返すべきです。さらなる中断を避けようとしてセットから号砲までの滞留時間を短くすべきではありません。

「立って」の指示はスターターが良い公平なスタートができないと判断した時にはいつでも与えるべきです。これらはトラック上の障害物、航空機の騒音、観衆やアナウンサーによる原因、あるいは競技者が構えに入る時間が長すぎるときに与えます。また「立って」の指示は不正スタートの後にも与えられます。

Start Information System（S.I.S.）の使用

大規模競技会の際に、スターティングブロックは Start Information System が使用されます。このシステムは現在様々な競技会で使われています。この場合、スターターは機器によって反応時間が 1000 分の 100 秒未満の時に検知され発せられるシグナル音をいつでも聞き取ることができるように機器に連結したヘッドフォンを身につけます。（機器によっては自動的にリコール音を発信するものがあります）スターターはピストルを発砲した後、信号音を聞くやいなや、リコールをし、スターターはどの競技者に不正スタートの責任があるか検証するために、すぐに SIS の反応時間を確認する必要があります。

(10)風力計測員（第 134 条　CR27）

風力計は 200ｍまでのすべてのレースと走幅跳、三段跳で使います。風力計を操作する審判員は規則と機器の操作に熟知していなければいけません。

操作している間、風力計の近辺には障害物（人も含めて）がないようにすっきりさせておくことが重要です。

## 第 5 章　フィールド競技

フィールド競技は、8 つの異なった種目が行われます。それぞれは固有の技術と異なった規則で行われますが、種目を審判するにあたって、共通の事項があります。
フィールド種目において、審判員は競技者を彼らの気分を害することなく対応し、公平に競技を行わせる必要があります。また、チームによる努力が必要なので、審判長・主任の指示のもと、しっかりと自分の与えられた任務を果たすことが大切になります。

(1)フィールド競技審判長

フィールド競技審判長は、規則通りの遂行や成績に責任を持ちます。具体的には、競技場所の決定や同時に複数の競技に出場している競技者の試技順序の変更、さらに助力を受け

ている競技者への警告や除外の判断、計測の立ち合い、計測装置の点検の立ち合いなどです。審判長はさらに招集所から表彰まで、参加競技者の行為について責任を持ちます。

小規模な競技会では審判長は一人で十分かもしれませんが、男女や違った年齢グループのように多くのフィールド種目がある競技会では 2 人以上の審判長で任務を分担してもよく、そのような場合は、相互に協力します。

➢審判長の任務は、割り当てられたフィールド種目を取り仕切ります。すべての審判員主任が現場にいて適切な審判員に任務を割り当てさせます。競技規則が正確に守られていることに責任を持ちます。審判員間で意見が異なる場合は決定します。

➢走高跳・棒高跳において、バーの競技開始の高さやそれに続く上げ方、許される試技回数を確実に競技者に伝えます。これがプログラムに印刷されているならば、それでも構いません。

➢競技規則に明記されていない問題点の議論について決定します。

➢競技者の行為についての異議・抗議について決定します。滅多に適用する権限ではありませんが、不適切な行為を行った競技者を競技会から除外します。

➢種目を時間通りに進行させます。

➢記録が達成されたときにも計測と器具を点検し記録の計測を監督します。

➢審判長の見解で、もし競技場所の状態が良くないと判断したときには競技場所を変更します。風の強さや方向の変化は競技場所を変更するに十分な理由とは見なされません。

➢最終結果を確認し記録表に署名します。

➢審判長は競技開始前に、技術総務と協力してすべての施設を点検します。競技会中、審判長は様々な審判員が適切に任務を遂行していることを確認するために巡回します。審判長は競技の進行状況についても監督します。

**規則とその詳細**

この章で、WA や日本陸連のハンドブック/ルールブックに記載されているすべての規則や詳細を説明しません。とりわけ走高跳や棒高跳において同成績があるときの解決法や多くの参加者がいるときの競技運営の方法を学んでください。

**(2)フィールド競技審判員**

各フィールド種目は 1 人の主任と 3 人以上の審判員が必要です。主任から与えられた任務をしっかりと遂行しましょう。競技の進行中に注意力をそらしたり気を抜いたりすることはできません。競技者が試技を行おうとするとき、各審判員は何が起こるかに集中し、同時に行われているトラックや他のフィールド競技の様子も注意します。

競技規則は公平に適用しなければなりませんし、公平で適切な判断をする必要があります。審判員は競技に必要なすべての用器具がそろっているかを確認するために、競技開始前に競技場所で確認します。そして技術総務と用器具係に監督された用器具を受け取るゆとりを持ちましょう。

**①種目の審判**

ここでは各種目に共通していることについての説明にとどめ、各種目の詳細は後に記載します。審判員は競技者の氏名を主催者から提供されたリストで確認しなければなりません。また、手書きでの競技会であるならば、それらを競技者の番号とチーム名とともに記録用紙に書かねばなりません。競技者以外の他のすべての人々（コーチ、父母、友人は認められません）は競技場所から排除しなければなりません。個人の投てき物は競技会において使用確認および承認がなされなければ、持ち込むことはできません。フィールド競技審判員は試技の有効あるいは無効を示すために白旗または赤旗を適切に挙げる必要があります。

**②試技順**

競技における試技順は、競技会の開始前に主催者が抽選し決定します。

走高跳と棒高跳を除くすべてのフィールド競技では、最後の 3 つのラウンドの試技順は、最初の 3 つの試技後に記録されたランキングと逆の順序（記録の低い順）になります。

競技者が同時に 2 つの種目に出場する場合のみ、審判長は 1 ラウンドに 1 回の試技、または走高跳と棒高跳の 1 試技ごとに、抽選で決定された順序とは異なる順序で試技を行うことを認めることができます。また、競技者が試技の場にいない場合、許可された制限時間が過ぎると、それはパス扱いとなります。同時に 2 つの種目に出場する場合以外は無効試技と見なされます。

**③不適切な遅れ**

与えられた試技時間を過ぎた場合、試技は認められず、無効試技として記録されます。すべての種目では 1 分間の試技時間が与えられています。走高跳と棒高跳では、競技者が 2 人または 3 人しか残っていない場合、走高跳が 1 分 30 秒、棒高跳が 2 分に延長されます。競技者が 1 人だけの場合、時間はそれぞれ 3 分と 5 分となります。混成競技では競技者が 1 人だけの場合、単独種目とは試技時間が異なるので注意が必要です。現在、競技者が 2 回連続して試技を行う場合、関連するルールでより多くの時間を許可する場合を除き、棒高跳で 3 分間、その他のフィールド種目で 2 分間許可されます。この規定は混成競技にも適用されます。

競技者は残り時間を示す時計を見ることが出来なければなりません。時計が利用できない場合、審判員は黄色の旗をあげるか、他の方法で残りの時間が 15 秒であることを示さなければなりません。

競技者が制限時間の終了時に試技を開始した場合、試技は許可されます。試技時間が過ぎれば無効試技として記録されます。競技者が試技の過程で妨害された場合、代替試技が与えられます。例えば、競技者が競技している最中の他の競技者、競技役員または観客の横断または、カメラマンのフラッシュでの妨害などです。

いったん競技が始まると、競技者は練習目的で競技エリアを使用することはできません。

**④メジャーの使い方/科学計測装置**

メジャーを使うときは、強く引っ張りすぎないように注意すべきであり、そうしないと記

録の読み取りに影響します。審判員はゼロポイントと読み取りポイント間を絶対に真っ直ぐにしなければなりません。

**(3)高さの跳躍競技（走高跳と棒高跳）**

共通事項は以下の通りです。

**①一般的注意事項**

用器具は適切に機能するように確認します。競技用に選んだクロスバーが損傷したり壊れたりした場合に備えて予備のバーを手元に置いておきましょう。着地場所はどのような跳躍方法をとる競技者やどのような高さから着地する棒高跳競技者にとっても安全なようにします。

競技のためにバーをセットする際、バーの中央または、バーがたわんで最も低くなった場所を計測します。バーは新たな高さ毎に確認します。新たな計測は、競技者がもしバーの上に落ちたときやバーを蹴り飛ばしたとき、あるいは大会記録等に挑戦するような場合には行ないます。大会記録等に挑む場合、バーが記録の高さに置かれたときには毎回計測し直さねばなりません。

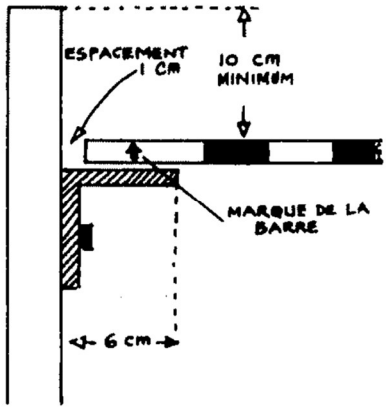
競技者は跳躍種目においてビブスを胸または背のどちらか一方にだけつけることができます。

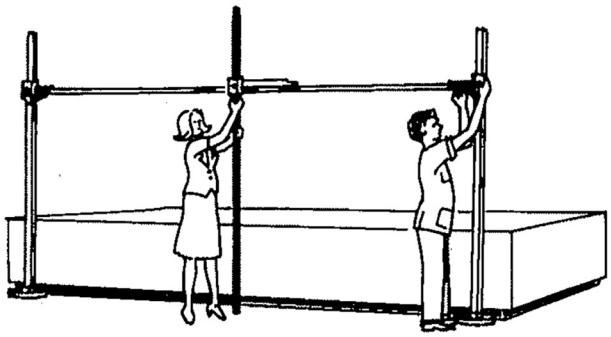
最初の高さと競技開始後に引き続き上がっていく高さは競技開始前に競技者に伝えらます。最初の高さから試技をしない競技者に開始の高さを聞いておきます。この情報は競技者を呼び出す審判員によって記録用紙に記載します。

競技者がたった 1 人にならない限り、各ラウンド後に走高跳で 2cm、棒高跳びで 5cm より少なくバーを上げることはできませんし、バーの上げ幅を増すべきではありません。このルールはまだ競技している競技者らが世界記録/日本記録の高さに上げることに合意した場合は適用されません。

混成競技において、バーの上げ方は競技会を通して一律です。

棒高跳において競技開始前に競技者は支柱の位置（アップライト）を担当する競技役員に希望を伝えます。そしてこれを記録用紙に記載します。競技者は支柱の位置を変更したい場



合には当初要求した位置に支柱が移動する前に競技役員に伝えます。そうでなければ、支柱を移動させる時間は競技者の試技時間に含まれます。

記録用紙には、跳躍をパスする場合には「－」、成功の場合には「○」、失敗の場合には「×」を記入します。（記録用紙には）点(ドット)を用いたり空欄にしたりしないようにします。競技者が 3 回続けて失敗した場合には、競技を終了します。それゆえ競技者は、ある高さで試技をパスした場合、パスした時点でその高さの試技はできませんがまだより高い高さで試技をしても良いことになります。競技者がどの高さにおいても試技を放棄した場合、彼は以後の高さの試技する権利を失います。

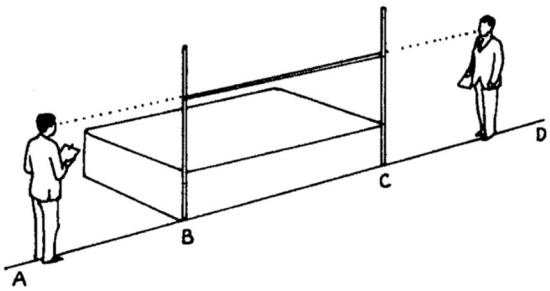
他の全ての競技者が競技を終了した場合でさえ、優勝した競技者は試技する権利を失うまでその権利を持ち続ける（混成競技を除き、事前に周知された高さのリストはもはや適用されません）ことができます。彼の最も良い記録が公式の優勝記録となります。

吹き流しは風の強さと方向を示すために全ての跳躍種目の踏み切り位置付近に置きます。

**②走高跳**

審判員主任と少なくとも 2 人の審判員が必要で、1 人は必要に応じてバーのセットや置き直しを補助するために必要です。4 人目の審判員がおけるならば特に競技者の呼び出しにあたります。

競技者が触れたならばバーが容易に前にも後ろにも地面に落下するために支柱とバーの端の間には少なくとも 10mm の間隔がなければなりません。審判員は支柱の延長線上に立って風が吹いているときに風によってバーが落ちたのか競技者が触れてバーが落ちたのかを注意深く見て決めます。競技者が跳躍する前に風がバーを振動させてしまうことがあり、審判員は後までバーをじっくり見る必要があります。




もし競技者がバーに向かって助走を開始するが、跳躍しないと決めた場合、中断することができます。この場合、彼が ABCD（図参照）のラインを越えた着地場所やマットに触れなければ無効試技ではありません。

競技者は助走や踏み切りを補助する 2 個までの除去可能なマーカー（容易に取り除くことが不可能な物質；炭酸マグネシウムのようなものの使用は許可されません）を置くことが許されます。

バーを払いのけることは別にして、バー

を越えることなく支柱の手前の面を越えた着地マットまたは地面に触れた場合は無効試技です。

もし競技者が跳躍中にバーに触れ、それが振動を起こした場合、審判員は競技者が触った結果落ちていないかどうか確かめるまで判定してはなりません。

旗挙げの審判員だけが試技が成功かどうか判断できます。

**③棒高跳**

走高跳と同様に審判員主任と少なくとも 2 人の審判員が必要です。

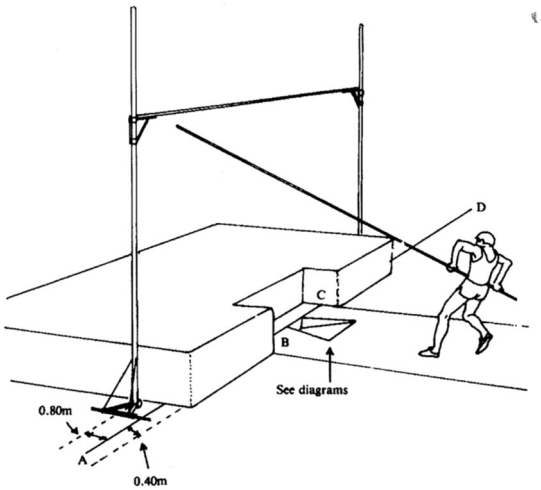
競技者は助走路に沿って外側に 2 個までのマークを置くことができます。またコーチが踏切の状況を見るために、主催者は 0 ライン（ボックスのストップボード内側上縁を通るライン）を起点として、2.5m から 5m までは 0.5m ごとに、5m から 18m までは 1m ごとにディスタンスマーカーを設置する。

風が強いとき、審判員はバーが競技者の行為によって落ちたのか風によって落ちたのかを判断するのが困難です。強い追い風の時には、競技者が試技を始める前に支柱にバーを固定しておくことも必要です。

ボックスが固定されているため、競技者は支柱を着地場所側に 80cm まで移動できますが、それは 0 ラインが基準となります。

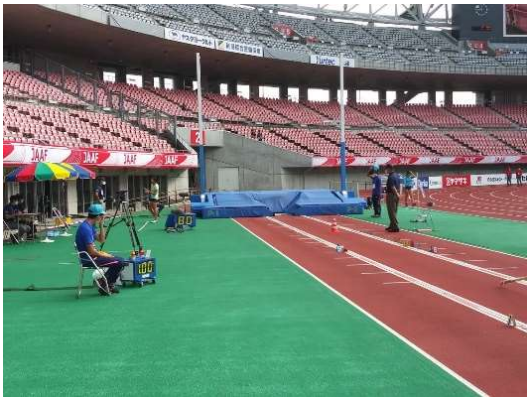
判定の補助としてストップボードの内側上縁のレベルで助走路の中心線と直角に 1cm 幅の白線を引きます。このラインは着地マットの二つの突出部の外側にも延長されます。

競技者やポールがバーを越える前に触れることが許されないのはストップボードの上を含む垂直面より着地場所側の地面もしくは着地場所です。




実際には、着地場所の上面に触れるのは競技者のポールの端ですが、もし競技者がストップボードに達する前に止まり、ポールを着地場所の上で維持できていれば、無効試技ではありません。

競技者は自分の所有するポールを使うことができますが、これらは仕様に合致していることの確認を受けなければなりません。ポールに巻いたテープの状態が適切（粘着テープは最大２層）かどうか競技中時々再確認することが必要です。競技者は所有者の許可なしに他人のポールを使う権利はありません。



もし競技者のポールが跳躍中に破損した場合、無効試技とは数えません。

競技役員はポールが損傷しないように競技者がリリースした後のポールを受けてもかまいません。ただしポールがバーや支柱から離れて行くまでポールを確保してはなりません。ポールはバーの下を通過することもあります。

**(4)距離の跳躍競技（走幅跳・三段跳）**

**①一般的注意事項**

着地場所の砂の表面は踏切板の表面と同じ高さでなめらかでなければなりません

砂場は競技者に危険がないように、よく掘り返し柔らかく湿らせておかねばなりません。

競技者は助走路内や着地場所にマーカーを置くことは許されませんが、助走路の外側に 2 個まで置いても良いことになっています。

競技者は踏切板の着地場所側の端よりも手前で踏み切らなければなりません。

跳躍距離は砂場の痕跡の踏切板寄りから踏切板の着地場所側の端までを測ります。手を含む体のいかなる場所で作られたものでも痕跡として扱います。もし競技者が残した痕跡が踏切線に近い外側の地面に触れた場合は無効試技です。もし計測距離が丁度 cm で無い場合は計測した距離以下の最も近い cm で記録されます（cm 未満切り捨て）。

踏切板の審判員は、競技者の体のいかなる部分も踏切線を越えた先の地面に触れていないことや跳躍することなしに走り抜けているかどうかや跳躍中の行為を目視しなければなりません。

もし競技者がピンの長いスパイクシューズを使っているとこの爪先が地面に触れることなく、痕跡を残すこともなく踏切板の着地場所側端を越えることが可能です。

競技者が砂場に着地したら審判員はピンを砂場の痕跡に垂直に刺しメジャーのゼロをここに固定します。それから距離は踏切板の端でメジャーをわずかに左右に最小値が示されるまで動かしてメジャーが踏切線に対して直角であることを確認して読み上げます。もし着地場所の痕跡が直角に測定しようとするとき踏切版の外側にあるならば、画板等を使って踏切線を延長させることが必要になります。

走幅跳と三段跳では風速を助走路に沿って置かれたマークを競技者が通過した時点から 5 秒間各試技において計測しなければなりません。走幅跳におけるマークは踏切線から 40m 地点、三段跳では 35m 地点に置かれます。両種目において風力計は踏切線から 20m、助走

路から 2m 以内に置かれ、その高さは 1.22m です。

この二つの種目において、競技者が跳躍を完了するには、競技者は着地場所の砂場の中を歩いて戻ってはならず、着地場所より前方の砂場との境界線から出なければなりません。

**②走幅跳**

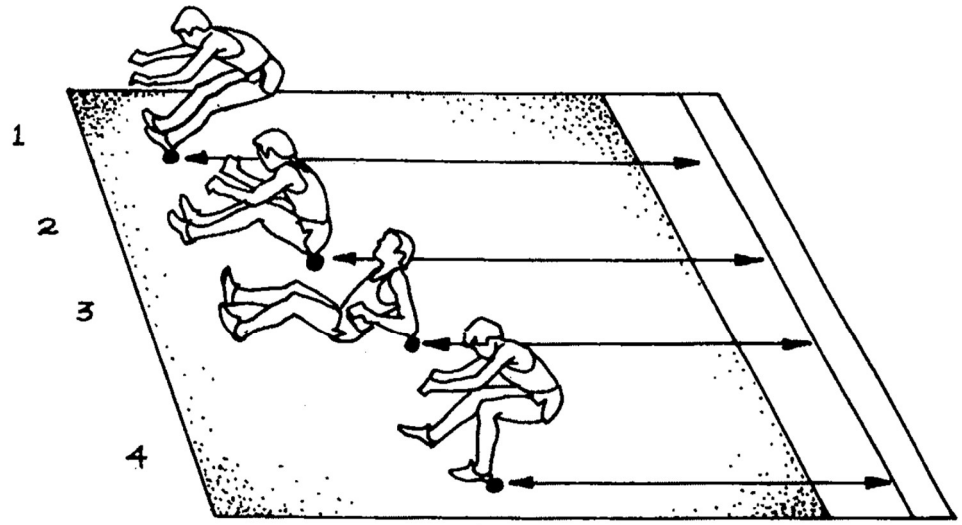
第 1 の審判員主任と少なくとも 2 人の審判員が必要です（加えて風力計測員）。

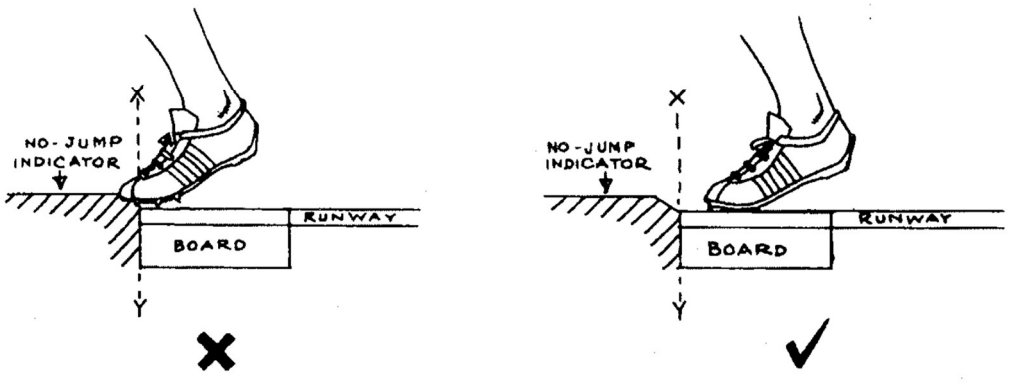
審判員主任は踏み切りが正しく行われたかどうかを決定する責任があります。彼は無効試技を示すために挙げる赤旗を、有効試技を示すために挙げる白旗を持たねばなりません。主任はまた跳躍距離を記録し、確認しなければなりません。

第 2 の審判員は砂場の痕跡にピンを刺しメジャーのゼロを固定します。

第 3 の審判員はメジャーを固定し踏切線に対して正しい角度になっているかを確認します。加えて記録を記入する審判員がいます。

主任は記録を読み上げ、記録用紙に記録します。第 3 の審判員も記録用紙に記録します。もし四人の審判員がいれば、彼は助走路の遠い端で競技者の呼び出しを担当します。跳躍が計測された後、主任は次の競技者のために砂場を均し準備されるまで助走路に立つべきで

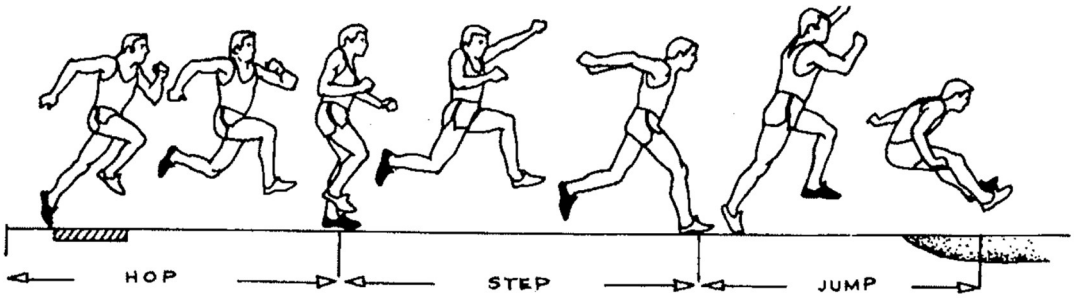


す。コーンがあればそれを踏切板前に置いて試技開始するタイミングではないことを知らせます。

**③三段跳**

三段跳は同じ脚が着地するホップ、続いて他の脚が着地するステップ、それから着地場所に着地するジャンプからなります。右足踏み切りの場合、正しい連続は、右・右・左そして




走幅跳のように着地となります。それ以外は無効試技です。経験の少ない競技者は「振り出し」脚が助走路表面に触れることがありますが、引き続き連続する正しい脚であり、ステップからジャンプの着地にもたらされます。これは無効試技ではありません。

イラストの連続は左足踏み切りの正しいものです。追加の審判員には走幅跳に比べて踏切版から最後の着地までの間の一連の動作を見ることが求められます。

全ての競技者に公平を確保するため、競技開始前に跳躍の有効の決定は着地場所から離脱するまでだということを競技者に伝えます。

**(4)投てき種目（砲丸・円盤・ハンマー・やり）**

**①一般的注意事項**

これらの 4 種目はそれらの違った技術によって区分されますが、それら全てに適用されるルールがあります。

砲丸・円盤・ハンマーは全てサークルから投げます。競技者はサークルの金属の縁の内側に触れても良いが、一旦投てきが開始されたら競技者は金属の縁の上部を含めた外側の地面に体のいかなる部分も触れてはなりません。

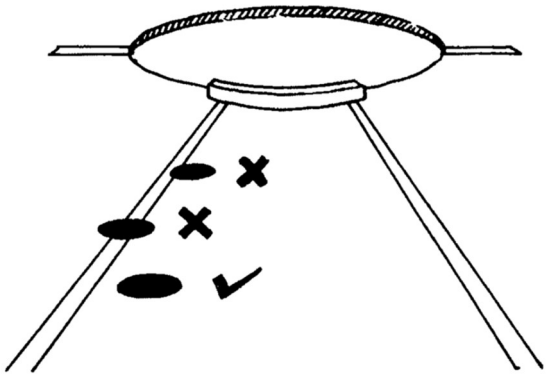
このルールに抵触しなければ、競技者は、許された時間内で静止した状態から試技を再開しても良く、またサークルから出ても構いません。

器具はグラウンドに引かれた有効投てきを示す白線の内側に完全に落下しなければなりません。審判員はマーキング用のピンを置いて着地地点を示します。

計測は投てき器具の落下による明かで最も近い痕跡からサークルの縁の内側（やり投では弧の内側）まで、投てき後直ちに行ないます。

競技中の安全確保はこれらすべての種目に共通する最重要課題です。競技者、競技役員と観衆は最大限保護されなければなりません。競技者には安全のためのルールを周知します。

練習投てきは審判員の監督下で競技場所でのみ行うことができます。競技が開始されたら競技者は練習目的で投てき器具を使うこと、あるいはサークルや着地区域を練習で使うことは認められません。投てき器具は練習中や競技中常に運び戻さなければならず、投げ返したり転がしたりしてはなりません。



着地場所の中には何も印があってはなりません。ラインの一つずつがグラウンドのどの部分からも見えるようにするため、記録や個人の投てきを示すマーカーは有効投てきを示す白線の外側に置きます。

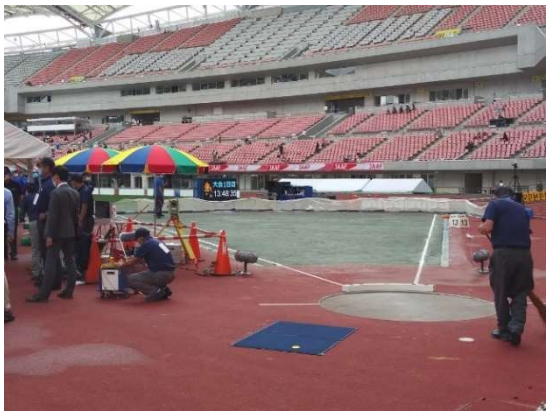
多くの競技会において主催者は各競技者の個人的な要求にあう投てき器具を十分なだけ供給できないと考えられます。競技者はこのような場合、彼ら所有の器具を提供することが認められますが、それは検査を受けねばならず、もし規格に合致すれば、審判長もしくはその権利がある競技役員によって承認されます。もし個人の器具が認められれば、それには識別するための印が付けられ、審判員は常に監視を行い、使用されているすべての器具が主催者によって供給または承認されていることを確認する必要があります。個人の器具は競技終了まで共同利用の一部になり、どの競技者も利用できます。個人器具の所有者は他の競技者によるその器具の利用を拒否できません。

競技者は審判員が他の着地区域にいる審判員の準備が整うのが完了するまで、試技の開始を許されません。競技役員は試技が開始されるまでサークルの中ややり投のスターティングラインに立っています。コーンが用意できればそれを置いて代えることもできます。

いかなる物質もサークルや競技者の靴にまき散らしたり吹き付けたりしてはなりません。

2本または3本の指をまとめてテーピングするような仕掛けは許されません。しかしながら、指1本ずつが独立して動かせるならば手のテーピングは許されます。

松ヤニのような粘着性の物質を投てき器具のグリップをより良くするために、手に付けるかもしれません。しかしそれらは濡れた布で容易に拭き取れ、後に残らないような物でなければなりません。



競技場所において競技者は試技が許されます。プログラム順で試技を行います。

有効試技の最中に投てき器具が壊れた場合、競技者には代替の試技が与えられます。

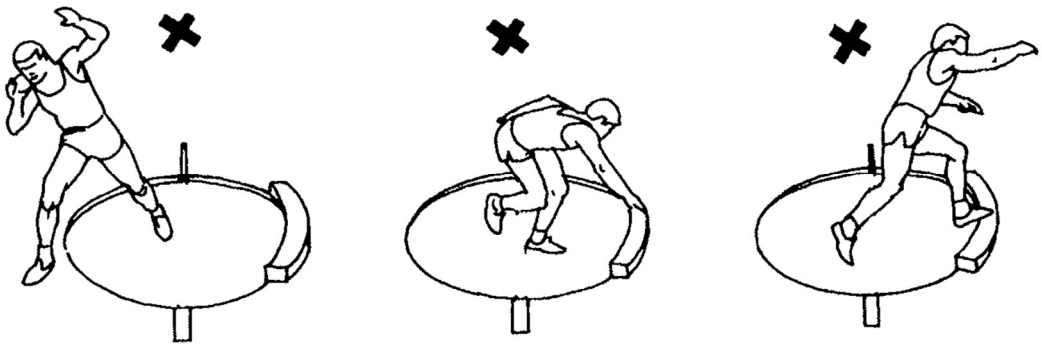
投てき試技局面の最後には審判員が集中して何が起こっているかを見なくてはならない

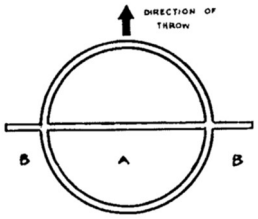
たくさんのものがあります。サークルで判定する審判員は投てき器具の飛行を見る必要はなく、競技者特に足を見続けなければなりません。

**②サークルからの種目**

競技者はサークルの中で静止状態から試技を開始しなければなりません。サークルに走り込んだり飛び込んだり、静止状態なしに試技を始めることは許されません。

競技者が試技を始めたとき、もし彼が体のどの部分でもサークルの上部(砲丸投ではストップボードの上部)やサークルの外側の地面に触れたら、無効試技になります。






競技者は投てき器具が落下するまでサークルの中で待たねばなりません。

サークルを離れる時、重要なのはサークル外の地面への最初の接触が、サークル（の縁枠の上部を含む）の中心を通して外側に引かれた白線の完全に後ろかどうかです。

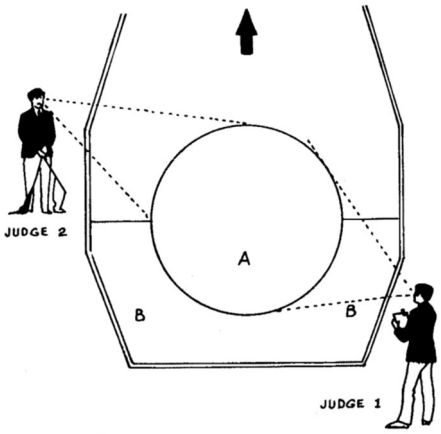
脚の動きは非常に速い（特に円盤投・ハンマー投）ので、審判員にとって違反が起きているかどうかを判断するのは困難です。もし疑いがあったならば、競技者は「疑わしきは罰せず」で対処すべきです。2 人の審判員が全ての投てき地点には必要です。

**③砲丸投**

この種目の有効試技は、いわゆる「put」つまり片手で砲丸を肩から「push」することです。競技者は砲丸を首又は顎に付けるかまさに付けるような状態から開始し、その時から手は下げず、その時から砲丸は肩の線から後ろになってはなりません。これは全て（肩を使った）投げる動作であってはいけないということです。競技者は頭と一緒に動く砲丸が更なる勢いを得るために、しゃがんだ状態から開始することができます。競技者はサークルの中を横切って跳んだり滑るように移動したりしても構いません。ある競技者は勢いを付けるために回転動作を行う者がいます。

右利きの競技者の例；第 1 の審判員はサークルの右側で競技者の手と足の違反を見て；競技者を呼び出し、距離を記録します。

第 2 の審判員は主にサークル上部とストップボード上部の足の違反をストップボード側の位置から見ます。有効試技・無効試技の表示に旗が使えるならば、主任審判員として行動します。



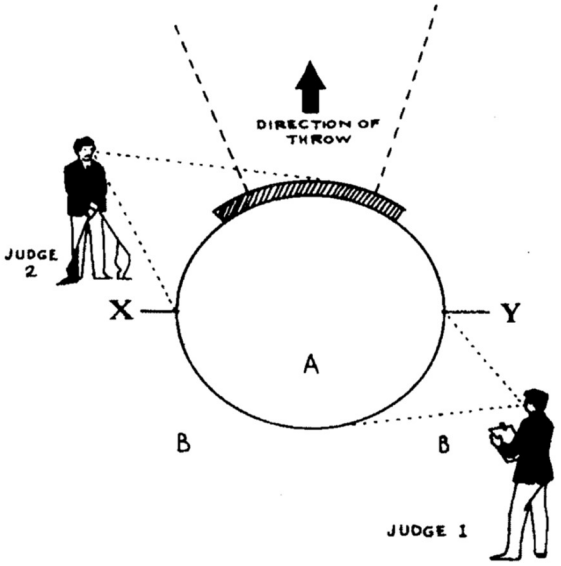

左利きの競技者の場合は、これらの審判員は次のように位置を変えます。第 3 の審判員は砲丸が着地するセクターの外にいます。そして、砲丸の痕跡のサークルに近い端にピンを刺します。砲丸が落ちた場所にマークを付けるのは簡単ですが、砲丸が前の着地点の非常に近くに落下する可能性があります。

メジャーはストップボードの上を通り、サークルの中心を通って 1 人の審判員が引く間にもう 1 人の審判員が測定した距離を読み取ります。計測は試技の後、直ちに行われなければなりません。砲丸投において、全ての投てきは切り捨てした 1cm 単位で記録されます。

**④円盤投**

円盤を投げる方法に規定はありません。競技者は自分が選んだポジションを採用し、円盤をリリースする前に自由にターンをすることができます。

投てき者によって行われたターンのために、経験の浅い競技者によって円盤があらゆる方向にリリースされる危険があります。ルールブックで推奨されているように、サークルの近くにいる他のすべての競技者と競技役員は囲いの外にいる必要があります。




サークルのところには 2 人の審判員が必要です。

第 1 の審判員は競技者を呼び出し、競技者がターンするときに、特にサークルの後方で、足の違反を監視します。

第 2 の審判員は、足の違反を監視する-これらは円盤がリリースされる瞬間に行います。

競技者はしばしば、自分の足がサークルの上部に触れたことに気づき、すぐに引き戻すことがあります。

サークルのところにいる審判員主任は紅白旗を持ち、投てきが有効か無効かを示します。着

地区域のもう一人の審判員は旗を持たずに同じ任務を行います。
着地区域には 3 人の審判員がいて、少なくとも一人は円盤の落下地点の近くにいます。実際の落下地点は見つけるのは難しいので、着地区域にいる審判員は、特にグラウンドが硬く円盤が跳ねる場合には注意深く見ることが重要です。
もし円盤が前方の縁から着地した場合にはカーブした痕跡が明らかに見えるでしょう。着地した後、前縁に向かって傾いた場合は、カーブした痕跡の後ろに約 20cm の痕跡があるかどうかを確認する注意が必要です。もし円盤の着地が完全に平らであったら芝を掃いたようになるだけかもしれません。審判員はできるだけ円盤が地面に衝突する地点に近づかなければなりません。
痕跡用のピンは着地した痕跡の投てきサークルに最も近い側に置かねばなりません。審判員はできるだけすばやく、この作業を終える必要があります。
この種目では長いメジャーが必要であり、各投てきを即座に計測するために常に延ばしたままにしておきます。
メジャー端の「0」点は円盤が着地した痕跡位置に使用します。メジャーはサークルの中心を通してサークルの内側で計測されます。メジャーはねじってはならず、できるだけ真っ直ぐにしなければなりません。長いメジャーは高価であり、それが鋼鉄製ならば、不注意な人によって踏みつけられたり絡ませられたりして容易に壊れてします。
円盤投げにおいても cm 未満切り捨てで計測されます。

**⑤ハンマー投**

これは最も危険な投てき物が使われ、競技者、競技役員そして観客にあらゆる可能な傷害予防措置が取られなければなりません。その行動に対する警告を無視するようないかなる競技者に対しても甘い態度を見せてはなりません。

効果的な保護囲いであるために、2 枚の可動パネルは正しい位置になければなりません。右利きの競技者（反時計回りに回転する）には、左側のパネルを「閉め」て右側のパネルを「開け」ます。左利きの競技者では反対になります。

サークルの周りの囲いは完璧な安全装置であると思い込まないようにしましょう。審判員主任が囲いを点検すべきであるにしても、審判員らはハンマーが、例えば囲いの下あるいは以前修理した古い穴から囲いを突き抜ける余地のないことを確認するべきです。競技者がターンして囲いに向かって放たれたハンマーはものすごい力を持つので、それは常に非常に危険な物体として扱わねばなりません。ハンマーはネットの上を越えていくこともあるので、これも注視する必要があります。

審判員は競技前の練習投てきを監督します。そして競技が開始されたら競技者はハンマーを持って練習は許されません。もしレース中にハンマーがトラックに落下する可能性があり、それによってランナーを危険にさらす可能性があるならば、試技を許可できません。34.92 度の着地区域の外側 60 度を立ち入り禁止にした安全区域がありますが、ハンマーはどの方向にも行く可能性があります。

サークルのところの二人の審判員は円盤投と同じように審判活動を行います。着地区域の審判員は投てき物を注意深く見ていなければなりませんが、落下地点に近くいる必要はありません。なぜならば常にはっきりとした痕跡が付くからです。芝がわずかしかない硬いグラウンドではハンマーはバウンドしてそれがどこへ行くか正確に予測することは不可能です。

投てき者はハンマーを放す瞬間、ハンドルによって生じる摩擦力から掌を守るために手袋の装着が認められています。しかしその手袋は腹面および背面が滑らかで親指以外の指の先端が露出していなければなりません。

投てき者が試技を始めるためにサークルに入ったとき、彼はハンマーの頭部をサークルの外側あるいは内側に置いても構いません。彼が一旦投てきを開始したら、体のいかなる部分もサークルやサークルの外側の地面に触れることは許されません。

もし予備スイングやターンの最中にハンマーの頭部が地面に触れてもそれだけの理由で無効試技にはなりません。動作を一旦中断してやり直すことは認められます。

ハンマー投では、ターンの間にハンマーがグラウンドに衝突するかもしれず、ワイヤー・ハンドルが壊れ、競技者はバランスを崩しサークルから出てしまうかもしれません：この場合には競技者は代わりの試技を与えられます。

この種目においても距離は 1cm 未満切り捨てで計測されます。

**⑥やり投**

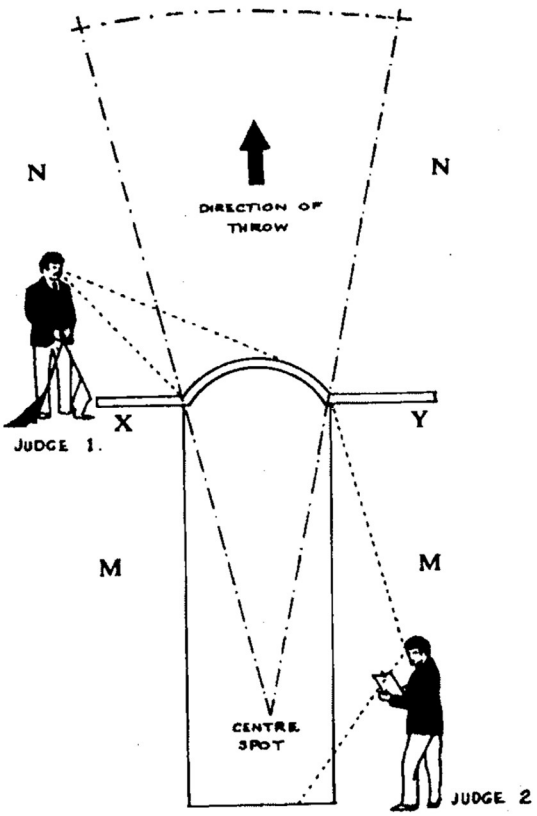
やりは銛の一種であり、突風によって偏向する可能性のある武器です。着地区域にいる審判員は注意深く見なければなりません。

投てき者がその後方でやりを放さなければならい弧（スターティングライン）は円の一部であり、それゆえメジャーが通らなければならない中心があり、（目盛りを読むときには）弧に対して直角に交わることをよく確かめる必要があります。

投てき場所には 2 名の審判員がいます。

第 1 の審判員はラインのところにいて投てきが有効か無効かを示す旗を持ちます。投てき者が体の一部がスターティングラインやそれを越えた先の地面に触れていないかどうかを確かめなければなりません。投てきが完了した後、着地区域に競技役員がいなくなるまで助走路に立ちます。

第 2 の審判員は競技者を呼び出し、助走を監視し、やりが規則通りに保持されているかどうかを見ます。彼はまたやりが肩よりも上、上腕よりも上で投げられていることを監視します。




記録を計測するとき、1 人の審判員はスターティングラインの中心でメジャーを保持し、他の審判員が読み上げる距離を記録します。距離は 1cm 未満切り捨てで計測されます。

投てきは着地区域の内側にやりの頭部が最初に触れた地点から即時に計測します。

審判員が二人いればやりの着地には十分です。彼らは着地するやりを側面からよく見えるように二つのサイドラインのそれぞれ立つべきです。

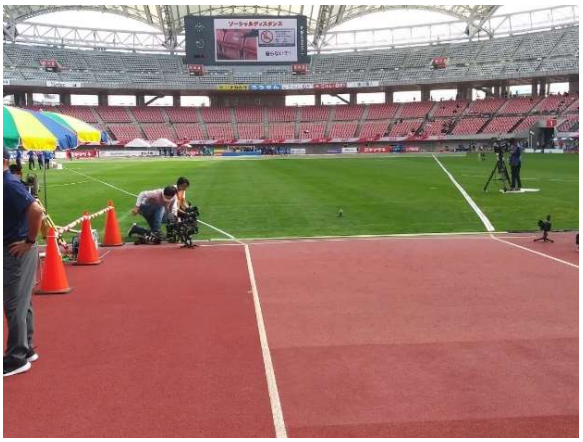
彼らの責任範囲は

・着地区域の内側に完全にやりの頭部が落下したことを確認します

・それが最初の着地であること

やりの飛行を見ているときに、審判員は着地の時に（近づきすぎることなく）側に寄って行っても構いません。

有効試技はやりの金属製の頭部が他のどの部分よりも先に地面に触れなければなりません。投てき者は投げ終わった後、やりが落下するまで助走路で待たなければなりません。彼はそれから、スターティングラインとその外側に延長されたラインの後ろ側から助走路を離れなければなりません。彼は通常「M」のエリアに入ります。



## 第 6 章　混成競技

五種競技から十種競技まで男女別、年齢段階別に数種類あります。規則に定められた順序で 1 日ないし 48 時間以内で行われます。

混成競技実施時には混成競技係と混成競技審判長が委嘱されます。混成競技審判長は混

成競技各種目について管轄し競技者の成績について責任を持ちます。

混成競技係は混成競技控室の管理と混成競技選手の動向を監督します。混成競技控室は各種目間の休憩室になります。競技者が快適に過ごせるような環境づくりをします。またこの部屋は各競技日の第一種目を除き招集所ともなります。競技者の点呼や FOP（競技場所）への持込品の点検、スパイクシューズの点検なども行います。控室から FOP への誘導や競技中のトイレへの引率、競技終了後の競技者の控室/ミックスゾーンへの誘導などマーシャルに準じた業務も行います。

〇一般種目との主な違い；詳細については各項目の内容を確認してください。

・スタート：1 度目の不正スタートは許されるが 2 度目以降の不正スタートからは当該競技者が失格となります。

・フィールド種目はすべて 3 回の試技だけです。

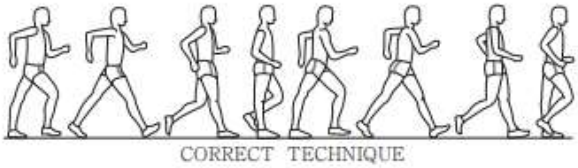
・高さの跳躍種目では 1 人になってもバーの高さは自由になりません。

・最終種目の 1500m/800m ではそれまでの成績順で上位者のみのグループを作ります。

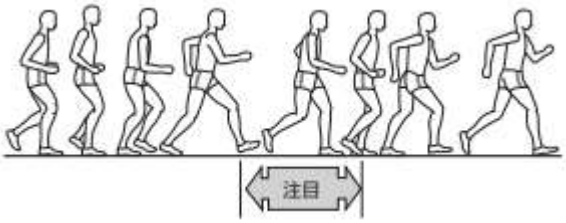
・風力を計測する種目の平均値が 2.0m 以内であれば混成競技の成績として公認されます。単独種目としてはそれぞれが 2.0m 以内でなければ公認されません。

## 第 7 章　競歩競技

トラックで行われる競技と道路で行われる競技があります。陸上競技の中で唯一審判員の主観的な歩型の評価が競技者の失格に影響する種目です。




歩型の評価では、ロス･オブ･コンタクト（接地不良＝「両脚が同時にグラウンドから離れることなく歩くこと」の違反）あるいはベント･ニー（膝曲がり＝「前脚は接地の瞬間から垂直の位置になるまで真っ直ぐに伸びていなければならない」の違反）を審判員の目視で行わなければなりません。




競歩審判員は主任を含めてトラックでは 6 名、道路は 6 名以上 9 名以内が配置されます。通常、主任は判定をせず、他の審判員からのレッドカードの集計･確認と失格の宣告を行います。競歩の定義に抵触しそうな競技者に対してはイエローパドルを提示して注意を促します。このイエローパドルは同一の審判員から同一のパドルは 1 回のみしか出すことができません。明らかに競歩の定義に違反している競技者に対してはイエローパドルを提示することなくレッドカードが出されます。3 名以上の競歩審判員からレッドカードが出された場合、その競技者は失格となります。

＜ペナルティゾーン＞

近年採用されたシステムで、レッドカードが 3 枚で出たとしても即失格とせず、レースの距離に応じてペナルティゾーンにて歩型の修正を行わせ、競技を完遂させることを狙いとしています。ペナルティータイムは、5 ㎞以下では 30 秒、10km では 1 分、20km では 2 分と距離に応じて滞留時間が決められています。しかしながらレース再開後 4 枚目のレッドカードが出れば失格となります。

競歩競技では、競歩審判員の他に、競歩審判員主任補佐、競歩記録員、競歩掲示板係、連絡員など競歩に特化した競技役員が委嘱されます。

## 第 8 章　道路競技

トラック＆フィールドのシーズンが終わるとともに、舞台が道路に移りマラソンや駅伝が主体となります。道路で行われる競技には競技場内以上に多くの競技役員が編成されます。トラックで行われていた長距離レースが道路に延長されたと考えると大きな違いはありませんが、コースが一方向路、往復、周回と様々なため、その大会に応じた競技役員の配置が求められます。競技運営車両に乗務してレースを監察することや、途中棄権者の収容などが、その例です。

**〇飲食物供給所**

トラックでも 5000m 以上のレースで気象状況に応じて行われるが、道路では必置となっています。飲食物供給所は道路コース計測にも関わるので予め計画されて設置されます。またエリートレースではパーソナルドリンクステーションが設けられ、競技者のチーム役員が手渡しすることも認められています。この時は手渡しの方法に、テーブルより前に出てはならない、伴走してはならないという規則があるため、これを監視する審判員が必要となります。

**〇たすきの中継所**

駅伝では各走者がたすきを保持し、中継所でたすきを手渡ししなければなりません。そのためのたすきを引き継ぐ中継所が設けられ、そこで区間毎の記録や順位が判定されます。その為の計時員や順位判定の審判員が配置されます。現在多くの競技会ではシューズやアスリートビブスに装着したトランスポンダーチップでの計測が主流になっていますが規模の小さな競技会では依然採用されています。